



富田町病院 院内探訪 おじゃまします!



Vol.
03

当院の診療放射線課は、2人の診療放射線技師で、外来や入院の日の対応のほか、夜間休日の急患対応もあり、必要時は電話呼び出しで病院に出て撮影することもあり、それを2人で回すのは、かなりたいへんです。

当院には、レントゲン、CT、骨密度測定器（DEXA）があります。据え付けの機械のほか、訪問診療で使うポータブルのX線装置とポータブルエコーがあり、X線は診療放射線技師が、エコーは医師が、患者さんのご自宅や施設など生活の場に持参して使います。訪問診療の患者さんにレントゲンやエコーの必要があった時に、わざわざ病院に来ていただかなくても、ご自宅や施設で撮影できる、在宅支援に力を入れている当院には必須の機材です。筆者も今回初めて現物を見せてもらって、そのコンパクトさにビックリしました。（写真）

普段心がけていることを聞くと、やはり「安全」とのこと。日常点検やメンテナンスを欠かさないそうです。医師のリクエストに応じて診断に必要な画像を的確に撮影するためには、撮影部位や診断内容に応じて、撮影する向きや照射する強度の調整など、微妙なものがあり、経験がモノを言う面も多いそうです。

また、診療放射線技師は「撮影する人」というイメージですが、撮影だけでなく、撮影もして、医師の診断のサポートもするほか、他院からの紹介で持参された画像も含めて、画像管理も大切な仕事だそうです。

（編集委員 平田）



ポータブルX線機器（右）
ポータブルエコー機器（左）
（肌）に貼るプローブ



ポータブルX線機器式
コンパクトな本体、
モバイルPC、パネル。

富田町 病院の 取り組み



糖尿病教室

富田町病院には「糖尿病チーム」があり、医師、看護師、リハビリスタッフ、薬剤師、管理栄養士、検査技師、事務職が毎月顔をあわせて、糖尿病に関する情報共有や必要な話し合いをしています。「糖尿病教室」も開催しています。

6月19日に開催した糖尿病教室では、「『間食』食べるなら何がいい?」と題して、「あれダメ、これダメ」ではなく、間食で気をつけることやおススメの間食などについて、管理栄養士からお話しました。糖尿病でない方にとっても、有益なお話でした。

お話した内容は、富田町病院の玄関入った所のラックに置いてある「DonMai通信」（糖尿病チームが発行する情報紙。水色のA4サイズ）13号に掲載しています。ご興味ある方は、ぜひご覧ください。



富田地域包括 支援センター からの お知らせ



／いきいき暮らすヒントが学べる！／ 健康アップ教室

- 日時** 毎月 第3月曜日
（祝日の場合は第2月曜日）
午前 10：00～11：30 **要申込**
- 場所** 富田公民館 2階／集会室3
（10月のみ大集会室）
- 持ち物** 筆記用具、飲み物、
健康パスポート（お持ちの方）

毎月いろいろな専門職から健康に関するお話を聞いたり、気軽に質問もできます。高槻市オリジナルの元気体操を行なって体も動きます。

2026年（令和8年）	
10月19日（月）	ノルディックウォーキング体験（別途申込・要参加費） 協賛：トップコーポレーション ゆとり
11月16日（月）	社会福祉士「ちょっと知っとこ 成年後見制度」 協賛：NPO法人 権利擁護たかつき
12月21日（月）	栄養士「今日からできる健康習慣!～カマンベールと カカオの秘密～」 協賛：株式会社 明治
2027年（令和9年）	
1月18日（月）	薬剤師「薬と上手に付き合うために」
2月15日（月）	栄養士「ロコモと骨粗鬆症と寝たきり予防～骨の健康 度測定～」 協賛：近畿中央ヤクルト販売株式会社
3月15日（月）	精神保健福祉士「ストレスとの付き合い方」

詳しくはお電話にて
お問い合わせください。TEL.072-694-2434

庸愛会 & 健康会 広報誌

ひとりひとりの思いに寄りそい、チームのちからで叶えます。

かなえ

Vol.
22

庸愛会 編集版

富田町病院の地域連携

当院は在宅支援病院として、住み慣れた街・場所でその方らしく暮らしていくことを支えます。そのためには、院内スタッフはもちろん、地域の医療・介護関係の事業所やスタッフと連携していくことがとても大切です。また「地域連携」と言うとき、医療や介護のスタッフだけでなく、地域に住むみなさんとの「連携」「つながり」が大切と考えています。当院は、これからさらに地域とのつながりを広げ、深めていきたいと考えています。

富田町病院 院長 蓑手 秀司



医療法人 庸愛会

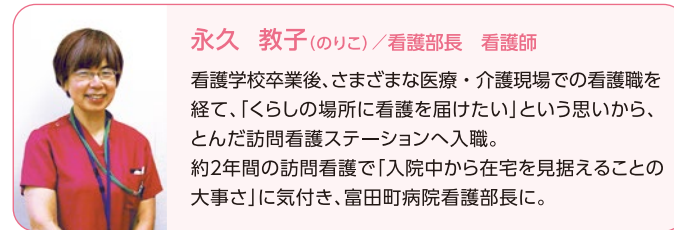


社会福祉法人 健康会

富田町病院の地域連携 - 私たちの現在地とめざすもの -

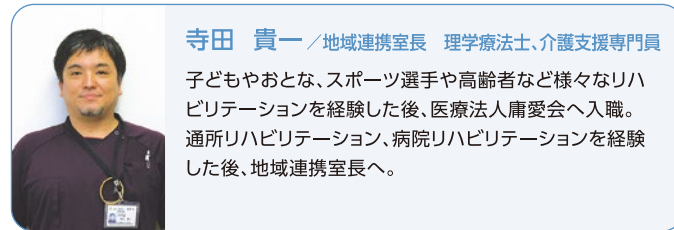
地域全体をみんなで支える 幅広い世代に 「暮らしのそばにある医療」を伝えたい

本紙前号では、富田町病院地域連携室のスタッフが日々の業務のなかで考え、実践している「つながり」について聞きました。
今号では、私たちがつくる「つながり」の現在地とめざしたい未来を、寺田貴一地域連携室長と永久教子看護部長に聞いてみました。



永久 教子(のりこ)／看護部長 看護師

看護学校卒業後、さまざまな医療・介護現場での看護職を経て、「くらしの場所に看護を届けたい」という思いから、とんだ訪問看護ステーションへ入職。
約2年間の訪問看護で「入院中から在宅を見据えることの大事さ」に気付き、富田町病院看護部長に。



寺田 貴一／地域連携室長 理学療法士、介護支援専門員

子どもやおとな、スポーツ選手や高齢者など様々なリハビリテーションを経験した後、医療法人庸愛会へ入職。
通所リハビリテーション、病院リハビリテーションを経験した後、地域連携室長へ。



前号では地域連携室のスタッフのコメントから、「相手の想いや願いを知ること」を大事にしていることが伝わってきました。

寺田：そうですね。それは患者さんやご家族に対してだけでなく、地域の中でつながりをつくっていかうとする時にとても重要なことだと思っています。たとえば地域のクリニックの先生方と連携させていただく時にも、その先生がどのような想いで患者さんやご家族を診ておられるか、何を大事に在宅医療をやっておられるか、そこに協働できる医療機関でありたいということを、当院の医師とも話しています。

そうした医療連携の中でのエピソードは

寺田：当院では地域のクリニックなどからの依頼でレスパイト入院をよくお受けします。退院後に患者さんのご家族からクリニックの先生に「入院前より体の動きがよくなって帰ってきました」というお声があり、別の患者さんの時にも「じゃあ、富田町病院にレ

スパイト入院相談してみようか」ということがあったりします。当院のリハビリは「チームみんなで」というのが強みだと思います。セラピスト(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)は専門的な視点をもって関わりますが、時間的には1日40分ぐらいの個別リハビリの関わりです。なので、それ以外の時間いかに患者さんにベッドから起きてもらうか、手作業など趣味活動の時間はとれないかなど、看護師やケアワーカー(看護補助者)が声をかけあって関わってくれます。様々な職種が患者さんにどんな関わりをしてほしいか意見を出し合い、実践するという「つながり」の成果が患者さんやご家族からの声に繋がっているのではないかと思います。

介護関係との連携は

寺田：関わる機会が一番多いのは、在宅プランを組んでくださるケアマネジャーさんですね。入院前の生活を一番知っておられるケアマネさんと、「今の状況」を把握している私たちがお互いの持っている情報を共有することが大事だと思います。

永久：入院早期から退院後の暮らしを見据えて、院内だけでなく在宅療養を支えてくださる皆さんと一緒に患者さんの現状をみて、何が最適かを考えていくことが大事ですね。

退院後の場がご自宅でないケースも増えてきていますね。

寺田：そうですね。ご自宅以外に私たちが送り出す場との「つながり」はここ数年、特に意識して考えています。近隣の入所施設には地域連携室スタッフだけでなく、看護師やセラピスト

も一緒に見学に行かせてもらい、逆に施設側からも当院へ見学に来ていただく取り組みをしています。

永久：入所施設は「退院後の場」であると同時に、「生活の場」からの急性期的な入院を受け入れる私たちの役割から考えると「入院前の場」でもあります。病棟や外来で働く看護師には、その視点が今後さらに求められてくると思っています。「ここからこままでが病院の役目。ここから先は施設の仕事」ではなく、お互いの現場を理解し合うことで、どう協働すれば患者さんが安心して安定して「生活の場」にいられるかをイメージして、病院の中から一緒に支えていきたいです。「医療と介護」「在宅と病院」の橋渡しが私たちの大きな役割だと思います。

「生活の場」という表現には、どんな想いがあるのですか。

寺田：ご自宅で介護をされてきたご家族は、患者さんの退院を契機に施設入所を決断することに罪悪感を持たれることがまだ多いと思うんです。でも、患者さんが安心して生活でき、介護を受けられる環境を、ご本人ご家族や、様々な支援者と一緒に考えてたどり着いた結論が「施設入所」であったとしたら、それはご自宅ではないけれども「自分らしい生活ができる場」だと捉えてもらいたいという思いを込めて、この表現を使うことが多いです。ご本人の不安だけでなく、ご家族の罪悪感や「これでよかったのか」という思いに寄りそう言葉かけを大事にしています。

様々な「つながり」の話がありました。前号の表紙の文章で、「つながりを点から線へ、線から面へ」とありましたが、どんなイメージでしょうか。

寺田：地域住民の医療と介護を支えていくためには、私たちが院内での多職種のつながりをより強く切れ目なくしていくこと、法人の中でも病院と在宅どちらの強みも発揮していくことが大事だと思います。私たち1人ひとりのスタッフを「点」と捉えれば、「点」が「線」につながるものが土台です。

急性期病院の連携室とのwebミーティング



富田町病院待合にての健康講座(3月23日)

その「線」をいくつも作っていけば「線」が「面」になっていくと思います。地域の中では、私たちの法人自体が「点」であり、さまざまな医療機関や介護事業所、地域住民のみなさんとつながっていくことで、同じように「点から線へ、線から面へ」つながりが縦横無尽に広がっていくと思います。地域全体をみんなで「大風呂敷」を広げて包み込んで支える、その中に私たちもしっかり存在していたいと思っています。

そうしたことを、今後具体的にどうしていこうと

永久：富田町病院では、糖尿病専門医である澤井副院長を中心に多職種で企画運営する「糖尿病教室」、当院だけでなく、連携するたんば薬局さんや関連法人の健康会、富田地域包括支援センターなどからスタッフが集まって「健康講座」も定期的に開催しています。手軽に読める「かなえかわら版」も60号を超えて発行しています。「病院は病気になってから行くところ」ではなく、もっと日々の暮らしの中で身近な場でありたいという思いをさらに強くしています。

たとえば健康会のそらいろ保育園の素敵な園舎や、そこで展開されている「個」を大切にしたい保育の魅力に、庸愛会の私たちも接する機会があればいいなと思います。そこから、地域の子どもたちや、その子どもをとりまくおとなたちと私たちがつながりを持てる「場」や「機会」も考えていきたいです。そのことによって、もっといろんな世代の人たちに「暮らしのそばにある医療」を伝えていけたら、とめざすものはどんどん膨らみますね。

寺田：いまは「地域連携の会」などに近隣の医療機関からお声掛けいただいて参加していますが、私たちの強みを活かした「つながりづくりの場」を自分たちから提案していけるようになりたいと思っています。私たち自身が「つながる」ことと、私たちが「つなげる」役割を担うこと、そのどちらにも力を注いでスタッフと一緒にがんばっていけたらと思っています。